


平成30年度国立天文台研究集会開催報告書

平成30年 8月10日

国立天文台長 殿

代表者	氏名	(ふりがな) おくむら たいし 奥村 大志 
	所属・職	筑波大学数理物質科学研究科 博士後期課程2年
研究集会名	第48回天文・天体物理若手夏の学校	
開催期間	2018年 7月 22日 ~ 2018年 7月 25日	
開催場所	ロワジールホテル豊橋 (愛知県豊橋市)	
参加人数・国数 (国数は所属機関の国数)	324人(内招待講師14人)・国内のみ	
発表資料等 の情報	<a href="http://www.astro-wakate.org/ss2018/web/shuuroku.html">http://www.astro-wakate.org/ss2018/web/shuuroku.html</a> 研究集会のプログラムや発表資料等をまとめたHPがあればURLを記載してください。提出後に作成された場合もご連絡ください。国立天文台研究交流委員会HPにリンクを張らせていただきます。HPではなく、論文や冊子を作成している場合は、可能であれば一部ご提供ください。(論文の場合はDOIの情報でも可)	
研究集会の概要	<p>天文・天体物理夏の学校 (以下、夏の学校) は、天文学や天体物理学を研究する大学院生を含む若手研究者を対象とした研究会である。開催の目的は以下の三つである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・参加者に研究発表の機会を与える</li> <li>・参加者の知識を深める</li> <li>・参加者同士の交流を深める</li> </ul> <p>夏の学校は天文学や天体物理学の多岐にわたる領域を対象としており、参加者同士の分野を越えた議論や交流を促す為、合宿形式をとっている。研究を始めたばかりの学生にとっては、研究発表を行ない、議論する絶好の機会である。招待講師の方々には、各分野の最先端の研究についてご講演して頂いており、若手研究者が新しい研究課題を見つけ、専門の知識を深めていく良い機会でもある。このように夏の学校は、若手研究者の人脈形成、研究に対する意見交換、新しい研究課題の発見の場としての役割を担っている。</p> <p>夏の学校は天文・天体物理の将来を担う若手研究者全体に対して、様々なトピックを紹介できる絶好の機会でもある。この機会を使って、夏の学校では、若手研究者を対象とした全体企画を開催している。今年度は「天文学と安全保障」と題して、2018年度天文学会春季年会でも取り上げられた議題を、若手同士での議論を行い、意見を集約することを目的としている。</p>	

<p>研究集会の成果</p>	<p>今年度はここ数年連続して減少していた参加者が増加し、一般参加者310名招待講師14名の計324名であった。分科会発表では、15分の口頭講演（以下、a講演）、3分の口頭講演とポスター講演（以下、b講演）、ポスター講演（以下、c講演）の3種類の発表が行われ、今年度の各講演の発表者数はa講演138件、b講演35件、c講演121件であった。口頭発表では活発な質疑応答が行われ、ポスター発表では参加者同士の活発な議論が行われた。オーラルアワードの対象であるa講演では、分科会ごと投票により受賞者が選ばれた。ポスターアワードの対象であるb、c講演では分科会を制限せず投票により受賞者が選ばれた。最終日に行われたアワード講演では、アワード受賞者らが他の分科会の人も含む多くの聴衆の前で魅力的な講演を行った。参加者から研究や良い発表へのモチベーションに繋がるとの意見をいただき、アワードは自分の研究や発表方法を考え・見つめ直す良い機会になっていると考えている。</p> <p>招待講演は、7つの分科会で計14件行われ、各分野での最先端の研究などをご講演して頂いた。これらの招待講演は、若手研究者が分野を問わずに見識を広め、各分野の新しい研究課題や未解決問題に取り組む良いきっかけになった。</p> <p>全体企画では、「天文学と安全保障」と題して、近年様々な学術会議で問題になっている、研究と国防の関係について、天文・天体物理の若手研究者による討議や意見交換を行った。この題は2018年天文学会春季年会でも取り上げられたが、その際若手の意見が少なく、一つの問題となっていた。世話人には天文・天体物理若手の会事務局や同会から選出された天文学会代議員をお招きして、グループディスカッション等活発な議論が行われた。本企画を通して、多くの若手研究者に関心を持っていただけたと考えている。</p>
<p>その他参考となる事項 (希望事項も含む)</p>	<p>夏の学校全体としての課題である「運営の負担軽減」に対して、ここ数年会場の固定化を行ない大幅な運営の負担の軽減を図ってきた。しかし、固定化した会場の選定不足による参加者への負担(遠方からは前泊が必須等)などは議論されていなかった。今年度は「会場までの交通の便の良さ」に重きをおいて、4年ぶりに会場変更を行った。また学会開催実績のある大きなホテルを選ぶことで、以下のメリットがあった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 全ての会場(口頭、ポスター、食事、全体集会)が平面的に隣り合っており、参加者としては移動が、事務局としては管理・運営が格段に容易となった。</li> <li>• 会場設営や食事準備などを全てホテル側だけで対応して頂き、事務局の当日の仕事量が大幅に削減できた。</li> </ul> <p>一方で、会場変更による仕事の増加があったことも確かである。例年行っている作業すべてにおいて本当にその作業が必要なのか、もっと負担の少ない他の作業で代用できないかなどの検討を行ない、またそのノウハウを今後の夏の学校に引き継ぐことが課題である。</p>